

● 忘れたるヨーヨー一つ箱の上に幾日か丸く徐々にしぼめり

市川茂子

ヨーヨーにはゴム風船に水を入れてあそぶものがあり、じぶん的にはこちら。水ヨーヨーとく  
にいう。しぼむとあるので、こちらか。どんな機転で、置かれたものか、なにかそこに子供との接  
点があったんだろうか。忘れていたそれ。箱の上に置かれ、それがしばらくは丸く張りをたもって  
いたのが、徐々にしぼんでしまった、という歌。家居で、ヨーヨーとの距離感とは時間的なもの。時  
間のながれ方、でもある。それが、幾日（いくひ）か。

陽だまりの花に群れているシジミ蝶一匹はぐれて吾が前に飛ぶ

こちらは、はぐれてまでして、吾が前に飛ぶ。ここにも、微妙な距離感がはたらいっている。こち  
らは空間だが、言葉をもつてするひきよせ。花は何の花とは云っていない。シジミチョウは独特な  
形態、何かの間違いのような蝶だ。四句に立ち止まった。一匹は、ひとつ、と読んでいいかもしれ  
ない。

● 十八にてカナダに渡り白人の納屋に泊まりてただ働きせしとふ

梅津純子

ただ働（ばたら）き、か。もの語りする一連。とおしてよむといろいろつながるものがある。ファ  
ミリーヒストリーでもある。一連タイトル『佐藤惣右衛門物語』中の、佐藤惣右衛門は作者の大伯  
父になるといふ（二首目）。一首目の、（届きたる）赤や黄色のキャンデー（香る）、も七首目の、  
この歌で説明される。

敗戦の祖国の親族案じつつキャンデー送りしか財失く老いて

先達者惣右衛門ありて新田次郎の『密航船水安丸』生るる

同じ号の短信欄でも、二〇〇六年、バンクーバーで「密航船水安丸」渡海百年の記念行事があり、  
関係者の子孫、カナダ側日本側あわせて五百人が集った、とある（このことは歌にもある）。また、  
そこでの縁が、夫と兄の十五年に及ぶ研究のもととなったこと、出版が成ったこと、その出版物が  
『カナダ移民のパイオニア 佐藤惣右衛門物語』である。『密航船水安丸』は、新刊では入手できな  
いようだった。

● 常日ごろ通つてゐる道の始まりと終はりはどこぞ羽州街道

布宮慈子

通（とほ）つてゐる、か。一連タイトルも「羽州街道」。おおよそ在所の歌といつていいようだが、  
もどつて十年という年数がたった（一首目）。もどつたことで見直され、あるいは発見されるもの  
もある。ここでは目の前が羽州街道という（五首目）。

また、引用の歌につづいて、歌はそのルート、終始点を確かめている。  
福島こせりの桑折より宮城をかすめ、山形、秋田を通り青森・油川あぶらかはまで  
目の前の羽州街道いまにして狭き道なり車の行き来に  
今と昔と、生活のなかにとおっている歴史。そこにもみる親密さ。上町うはまちの勢至堂せいしどうも、もう歌でしっ  
ている。読み方もそう。

### 前号作品短評B 〈慈子〉

●三度目の出会い互いに無視をして三和土のトカゲと日向分け合う 大橋千佳子

実家の猫、蛇、ミニヒマワリ、百日草、アネモネ、蛙、山椒、キアゲハの幼虫などが出てくる「小さな隣人たち」と題する一連。掲出歌はいちばん皮膚感覚に訴えてくる歌だ。三和土たたき、トカゲ、日

向の組み合わせが違和感なく受け取れる。どこか懐かしい光景でもある。

数年を懐かぬ猫は今朝もまたオクラの列より伺いおりぬ

語れども視線合わせぬ子あるごと実家の猫は守る距離もつ

会話をしても目を合わせない子どものように、実家にいる猫は自分との距離を保ちながら接する、という。警戒心が強いのか、猫は現在の家族と区別するらしい。その緊張関係がおもしろい。

干からびて棘に刺されし蛙あり山椒を喰む幼虫の下

百舌もすの速贅はやにえというものだろうか。アゲハ蝶の幼虫は柑橘類の葉を食すが、調べてみると山椒もミカン科だった。人の思いなどとは無関係な自然の営みをとらえた一首。

●コインランドリーにきていれば人の出入りはマシンうごいてそれより少な 小野澤繁雄

現代の日常が映し出されている。コインランドリーでは何台かの洗濯や乾燥のマシンが動いているが、人が出たり入ったりはマシンの数より少ない。確かに終了までの時間が何分と表示されるので、洗濯や乾燥が始まったら買い物や何かで時間をつぶす。中で待つ人のほうが少ないのではないか。最近ではスーパーマーケットの近くやガソリンスタンドの敷地内など、コインランドリーがずいぶん増えた気がする。

いったんは拾いしものか小園はベンチ下にちらばれるドンダラ

公園を歩いていると、このような場面に遭遇するものだ。誰かが拾い集めたドングリが帰りしなにバラバラと置いていったのだろう、ベンチの下に転がっている。「ドングリら」ということで、捨て置かれたドングリに心を寄せる作者像が浮かび上がる。

●わが愛づる山桜の古木の根方より四方に広がる姿に礼なす

河村郁子

山桜の木といっても、秋の気配を色濃くするところである。自分のお気に入りの木なのだろう、根元から広がっている根の力強さに感心して自然と頭が下がるのだ。

折にふれ揺らぐ心を語りしに受け止めくれしもひたに黙せり

若き日に絶たれし恋のあとのごと秋寂びの森に静けさみつる

ときどき誰にも言えない心の内を語れば木は受け止めてくれるが、ひたすら黙って立っているだけだ。何ものにも邪魔されない、木との交歓が感じられて好ましく思う。三首めは作者自身の恋なのかどうかはわからない。若いころ遮断されてしまった恋の残りのように、秋の寂しい森には静けさが満ちているという。人の気配を消し去った森のようすは間近に冬が到来することを暗示させて、もの悲しい。

●「七転八倒百姓記」という著馬肥ゆる

新野祐子

菅野芳秀さんといえば、山形県長井市のレインボープランで知られた人である。レインボープランは、有機堆肥を田畑に投入する環境保全型農業をすすめるために、その堆肥の原料となる有機質資源の供給源を市民の台所から排出される「生ゴミ」に求めたことが始まりで、画期的な地域内完結型の循環システムだ。その菅野さんの新刊が掲出句にある書名。私も読んでみて、菅野さんがどういう経緯で嫌だと思っていた農業に取り組むようになったのか、彼の生き方そのものを知ることとなった。一連のタイトルは「菅野芳秀さんの新刊を寿ぐ」で、どれも削れない句らしく作品数が多い。

石呉れし妻との出会い草萌ゆる

うりずんの沖繩に知るころざし

ふるさとは帰るべき場所青田波

「のどか」「春平」名前に籠めシタスキ渡し

たいへんな人生の中にある数々のエピソードは彼の大らかな気質から出てくるもので、思わず笑ってしまう場面が多かった。作者はずいぶん菅野さんの影響を受けている。一つひとつの句は、本を読めばパズルのように明らかにになっていく。青田波は夏の季語。稲が育って青々とした絨毯のような田んぼが風に波打っているようすを表す。すでに彼の子どもたちへ櫛たすきは渡され、それは着実に受け継がれているようである。